

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（46）

新種子島空港建設による主要地方道西之表・中種子線付替え道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

三角山Ⅰ遺跡

（P 地 点）

2002年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、新種子島空港建設による主要地方道西之表・中種子線付替え道路建設に伴う三角山Ⅰ遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡は、種子島の新しい空の玄関口になる新種子島空港が建設される用地内にあります。今回の調査は、空港本体ではなく、空港北側を通る県道建設に係わる調査で、調査面積は560㎡と小規模でしたが、縄文時代の土器、石器などが出土しました。

この調査の成果である本書が、多くの人々に活用され、教育・文化研究の一端を担い、また、県民の皆様方の埋蔵文化財に対する理解を深めていただく機会になれば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査に御協力いただいた関係機関に厚くお礼を申し上げます

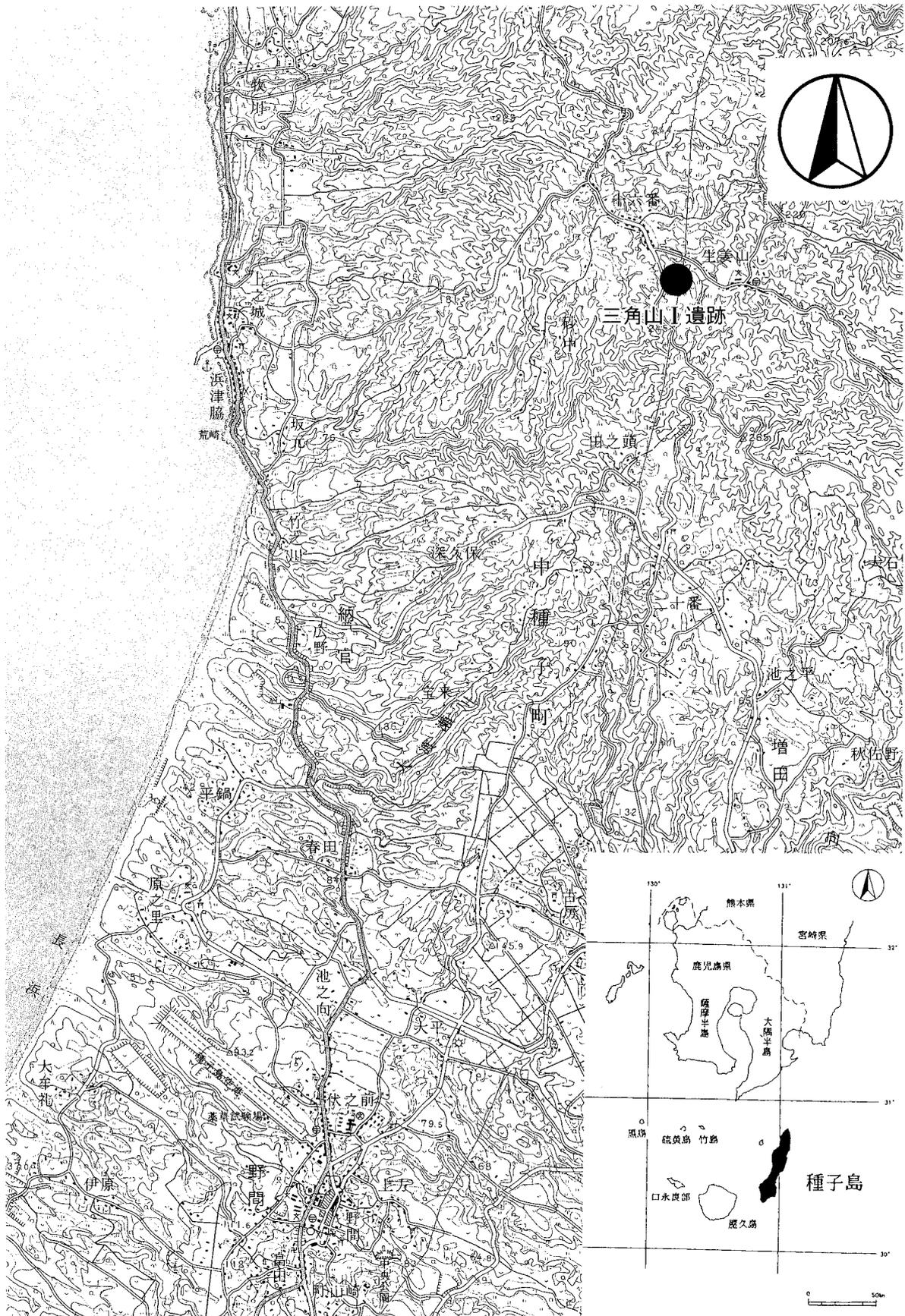
平成14年12月25日

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

報告書抄録

ふりがな	さんかくやまいちいせき							
書名	三角山Ⅰ遺跡（P地点）							
副書名	新種子島空港建設による主要地方道西之表・中種子線付替え道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	46							
編著者名	菅牟田 勉, 藤崎 光洋, 上床 真							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地-1							
発行年月日	2002年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 . ' "	東経 . ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号					
さんかくやまいちいせき 三角山Ⅰ遺跡	くまげくんなかたねちよう 熊毛郡中種子町 すななかあざさんかくやま 砂中字三角山	46 80	58	30° 34' 22"	130° 57' 10"	2000104 20001225 20010703 20010727	560m ²	新種子島空 港建設によ る主要地方 道西之表・ 中種子線付 替え道路建 設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三角山Ⅰ遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代早期				細石核 円筒形土器		



第1図 三角山 I 遺跡の位置 (1:50000)

例 言

1. 本報告書は新種子島空港建設による主要地方道西之表・中種子線付替え道路建設に伴う「三角山Ⅰ遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部の受託事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査については、中種子町教育委員会や熊毛教育事務所の協力を得た。
4. 本報告書の執筆は、県立埋蔵文化財センターの菅牟田勉が行った。ただし、第3章の第3節(1)出土遺物の細石核は、長野真一（県立埋蔵文化財センター）＜以下埋文センター＞が分析執筆した。
5. 出土遺物の整理復元作業等は、県立埋蔵センターの整理作業員が行った。ただし、本報告書に使用した出土遺物の写真図版のうち、遺物撮影は福永修一（埋文センター）が行った。
6. 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。本書の遺物番号は、各章ごとに通し番号をつけた。
 - ・ 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
 - ・ 本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれ挿図内に提示してある。
7. 本遺跡の出土遺物は、県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

本文目次

序 文

報告書抄録

例 言

目 次

第 I 章	発掘調査の経過	7
第 1 節	確認調査の経緯	7
第 2 節	本調査の経緯	9
第 3 節	報告書作成事業の経緯	10
第 II 章	位置と環境	11
第 1 節	自然環境	11
第 2 節	歴史的環境	11
第 III 章	発掘調査	16
第 1 節	調査の概要	16
第 2 節	層 序	21
第 3 節	出 土 遺 物	23
第 IV 章	ま と め	26

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	3
第 2 図	周辺遺跡位置図	13
第 3 図	三角山 I 遺跡調査区と周辺地形及び道路, 空港工事施工図	17
第 4 図	P 1, P 2 地点トレンチ配置図	18
第 5 図	P 3, P 4, P 5 地点トレンチ配置図	19
第 6 図	P 4 地点全体グリッド図と全面発掘調査実施範囲	20
第 7 図	土層柱状図	21
第 8 図	13トレンチ, 14トレンチ地層断面図	22
第 9 図	細石核実測図	23
第10図	円筒形土器, 土器片実測図	24
第11図	遺物出土状況	25
第12図	種子島における細石核出土遺跡分布図	30

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表	14・15
第 2 表	種子島細石核出土遺跡	25

図 版 目 次

遺跡近景	27
細石核出土状況	28
遺物出土状況	28
細石核	29
円筒形土器	29

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 確認調査の経緯

1 確認調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部（熊毛支庁空港建設室）は、熊毛郡中種子町砂中地内において新種子島空港建設を計画し、現在工事が進められている。空港計画地内には西之表市と中種子町を結ぶ主要地方道西之表・中種子線があり、計画地内を南北に縦断している。このことから鹿児島県土木部（熊毛支庁道路建設課）は主要地方道西之表・中種子線の付替え工事事業を計画した。

種子島空港計画地内には三角山 I 遺跡が所在しており、平成 6 年から全面発掘調査が行なわれ平成 14 年度に終了の予定である。道路建設計画地内にも三角山 I 遺跡の北側周辺部に当るため、熊毛支庁道路建設課はその取扱いについて、鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）と埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行なった。

協議の結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。確認調査は調査主体者である鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施し、平成 12 年 10 月 4 日から 11 月 20 日まで P 2・P 3・P 4・P 5 地点を、平成 13 年 7 月 3 日から 7 月 27 日まで P 1 地点を調査した。

その結果 P 4 地点で 400㎡にわたって旧石器時代・縄文時代早期の遺物包含層が確認された。なお地点は三角山 I 遺跡（空港部分も含む）全体を各々の地点に分けた。A～O 地点は空港部分、P 地点は、付替え県道部分である。本報告は P 地点のみの報告である。

2 確認調査の組織

事業主体者	鹿児島県土木部（熊毛支庁・道路建設課）		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課 主任文化財主事兼	
	〃	調査課長	新東 晃一
	〃	調査課長補佐	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	第一調査係長	青崎 和憲
	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課 文化財主事	大久保浩二
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課 文化財研究員	菅牟田 勉 (H12)
	〃	文化財研究員	上床 真 (H13)
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務課 総務係長	有村 貢 (H12)
	〃	総務係長	前田 昭信 (H13)

3 確認調査の経過

確認調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

平成12年

- 10月4日(水)快晴 発掘調査開始。作業用具など搬入。作業員へ発掘調査の手順と安全確認の注意。今年度調査区の除草。P4地点トレンチ設定。
- 10月5日(木)曇り P4地点トレンチ掘り下げ開始。
- 10月6日(金)曇り 13トレンチから石核出土。
- 10月12日(木)晴れ P4地点15～17トレンチ掘り下げ終了。出土遺物なし。
P3地点9～11トレンチ掘り下げ開始。
P3地点22トレンチ掘り下げ開始。
- 10月16日(月)曇り P4地点18トレンチ掘り下げ終了。出土遺物なし。土層断面写真撮影。
20トレンチから遺物出土。
15～18トレンチ土層断面実測。
- 10月17日(火)曇り 13～14トレンチ掘り下げ終了。P4地点全トレンチ掘り下げ終了。
13トレンチ、20トレンチで遺物出土。他のトレンチでは出土遺物なし。
- 10月25日(水)曇り P5地点22トレンチ掘り下げ終了。出土遺物はなし。
のち P4地点13～14トレンチ、18～20トレンチ土層断面実測
晴れ
- 11月7日(火)曇り P3地点9トレンチ掘り下げ終了。出土遺物はなし。土層断面写真撮影。
P2地点5トレンチ掘り下げ終了。出土遺物はなし。土層断面写真撮影。
- 11月8日(水)晴れ P3地点10トレンチ掘り下げ終了。出土遺物はなし。土層断面写真撮影。
P2地点6トレンチ掘り下げ終了。出土遺物はなし。土層断面写真撮影。
- 11月9日(木)雨 P2地点7～8トレンチ掘り下げ終了。出土遺物なし。土層断面写真撮影。
5～8トレンチ土層断面実測。
- 11月13日(月)曇り P3地点11～12トレンチ掘り下げ終了。出土遺物なし。土層断面写真撮影。
11～12トレンチ土層断面実測。9～12トレンチ土層断面実測。
重機による埋め戻し。

平成13年

- 7月3日(火)晴れ 今年度調査開始。荷下ろし、道具整理、調査区域内の草払い。
- 7月4日(水)晴れ P1地点 トレンチ設定。合計4トレンチ。
- 7月5日(木)晴れ トレンチ掘り下げ開始。
- 7月12日(木)曇り 1トレンチ、4トレンチ掘り下げ終了。遺構、遺物なし。
- 7月16日(月)晴れ 2トレンチ、3トレンチ掘り下げ終了。遺構、遺物なし。
- 7月18日(水)曇り 1トレンチ、2トレンチ土層断面図写真撮影、実測。
- 7月20日(金)晴れ 3トレンチ、4トレンチ土層断面図写真撮影、実測。
- 7月25日(水)晴れ 1～4トレンチ埋め戻し作業。

P1地点 確認調査終了。

第2節 本調査の経緯

1 本調査に至るまでの経過

県文化財課と県立埋蔵文化財センターは、確認調査の結果をふまえ、県土木部（熊毛支庁道路建設課）と協議を行ない、本調査を実施することとなった。

本調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが主体となり、平成12年11月9日から11月20日まで実施した。発掘調査の総面積は400㎡である。

2 本調査の組織

事業主体者	鹿児島県土木部（熊毛支庁・道路建設課）			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文	
		次長兼総務課長	黒木 友幸	
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課	主任文化財主事兼	
	〃	〃	調査課長	新東 晃一
	〃	〃	調査課長補佐	立神 次郎
	〃	〃	主任文化財主事兼	
	〃	〃	第一調査係長	青崎 和憲
	〃	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課	文化財主事	大久保浩二
	〃	〃	文化財研究員	菅牟田 勉
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務課	総務係長	有村 貢

3 本調査の経過

本調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

11月9日(木)曇り 表土剥ぎ，ベルトコンベアー設置，Ⅲ層検出作業。

11月10日(金)曇り スキ跡掘り下げ作業。

11月13日(月)曇り Ⅲ層掘り下げ作業，縄文時代早期土器出土。

11月15日(水)曇り/雨 出土状況写真撮影，縄文時代早期遺物取り上げ，コンタ図作成。

11月16日(木)曇り/雨 V層掘り下げ作業。

11月20日(月)雨 V層掘り下げ作業（終了），遺構検出。遺構なし。

第3節 報告書作成事業の経緯

1 報告書作成事業の経過

三角山Ⅰ遺跡の発掘調査報告書作成事業に伴う整理作業については、平成12年度の発掘調査においても遺物の水洗・注記・図面整理等の作業を並行して行なっていたが、本格的な作業は平成14年度に実施した。

2 報告書作成事業の組織

事業主体	鹿児島県土木部（熊毛支庁・道路建設課）		
報告書作成事業主体	鹿児島県教育委員会		
報告書作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上 明文
	〃	次長兼総務課長	田中 文雄
報告書作成企画者	〃	調査課 調査課長	新東 晃一
	〃	〃 調査課長補佐	立神 次郎
	〃	〃 主任文化財主事兼	
	〃	第一調査係長	池畑 耕一
	〃	〃 主任文化財主事	中村 耕治
報告書作成担当者	〃	〃 文化財主事	藤崎 光洋
		文化財研究員	菅牟田 勉
		文化財研究員	上床 真
事務担当者	〃	総務課 総務係長	前田 昭信

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 自然環境

中種子町の所在する種子島は、日本本土最南端の佐多岬から南東に約40km、鹿児島県庁の所在する鹿児島市の南方約116kmの海上に位置する。鹿児島空港から種子島空港までの飛行機における所用時間は約30分と比較的近く、県本土から日帰りも十分可能な距離にある。面積は447.09km²、南北約52km、幅は6～12kmの細長い島で、北から西之表市、中種子町、南種子町の1市2町からなる。最高標高282.3mの平坦な島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方にある九州最高峰の宮之浦岳を有する屋久島とは対照的な島である。気候も比較的温暖で冬場の気温は県本土より4～5度高く暖かい。その温暖な気候を利用してサツマイモやサトウキビ、パッションフルーツなど南島系の果物等の栽培がさかんである。また、台風の影響、接近なども多く、毎年雨、風の被害が出ている。南種子町の広田遺跡や中種子町の鳥ノ峯遺跡のように台風の影響により発見された遺跡もある。

地質構造は、中部以北に古第三紀層の熊毛層群が基盤岩となり、海岸段丘はこの熊毛層群を侵食して発達している。この熊毛層群を不整合に覆っているのが中部以南を中心にみられる新第三紀基永層群で、一般に東に傾斜し、ケスタ地形を形成している。また、この基永層群を覆っているのが上中層群で、島の中央部付近に広く分布し、基底に礫岩を伴い、中～上部は沙汰の悪い砂岩により多くの偽層が発達している。

遺跡の所在する中種子町は、種子島の中央部に位置し、北は西之表市、南は南種子町を境にする。面積は138.41m²で、地形は町の北側13番の西にある282.3mの最高点から、その回りには盛んに開折された段丘や台地が発達し、海岸面に緩やかな丘陵を呈している。中央部から南部にかけては、海岸付近を除けば、そのほとんどが丘陵性の台地で、比較的平坦な台地が多く広がっている。海岸線は一般的に西海岸が直線的で遠浅であるのに対し、東海岸は出入りがあり、海蝕台地が絶壁をなしていて、奇岩がみられる。

三角山Ⅰ遺跡は、鹿児島県熊毛郡中種子町砂中に所在する。地元では中線「なかせん」と呼ばれる主要地方道西之表・中種子線の十六番付近の沿線にある。西海岸から約3km内陸部に向かい、南西に屋久島を望む標高240mの台地上に位置する。また、この遺跡から南東方向に谷を越えた台地上には三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡がある。

第2節 歴史的環境

近年の大型開発工事に伴い、種子島においても発掘調査が盛んになってきた。種子島を起点とする南西諸島は、考古学的領域から、三域に分けることができる。種子島・屋久島・トカラ列島など九州本土の文化を強く受けている北部圏、奄美諸島、沖縄諸島など南九州の影響を受けながら、宇宿上層・下層式土器、沖縄の伊波荻堂出土土器などの南島土器文化を有する中部圏、先島諸島など日本本土の影響をほとんど受けず、逆にフィリピン、台湾のような南からの影響を受ける文化が特色の南部圏の3文化圏である。

以下、北部圏に属する種子島の中の三角山Ⅰ遺跡周辺の遺跡を中心に時代ごとに記述してみたい。

旧石器時代

種子島では、AT層の下位に種Ⅰ・種Ⅱ・種Ⅲ・種Ⅳの火山灰が堆積している。地域によっては4火山灰すべてが坑積しているわけではないが、各時期を特定する上で重要な火山灰である。中でも種Ⅳ火山灰（約31,000年前）は、種子島の後期旧石器時代の時期を特定する上で、重要な火山灰となった。南種子町の横峯C遺跡では、種Ⅳ火山灰下位から、礫群やハンマー等が発見された。また、中種子町の立切遺跡では、種Ⅳ火山灰下位から、礫群、焼土、土抗に伴い、磨石、敲石、台石、石斧などがセットで発見された。両遺跡とも種子島はもとより日本でも最古級の遺跡と考えられる。その他にも種子島の旧石器時代の遺跡として、西之表市の大中峯遺跡、湊遺跡等がある。

縄文時代

草創期の遺跡は、種子島で現在9か所の遺跡がある。三角山Ⅰ遺跡の近くでは、西之表市安城の奥ノ仁田遺跡がある。種子島の草創期の遺跡として最初に認識された遺跡である。同じく西之表市安城にある鬼ヶ野遺跡では、多量の隆帯文土器片に200点以上の石鏃、草創期では類例のない黒耀石製の石鏃、丸ノミ形石斧等が出土している。また、種子島全島をみると南種子町の横峰D遺跡でも隆帯文土器が出土している。その他に中種子町瀬戸口遺跡等がある。

早期の遺跡は、表採資料や、発掘調査例も多く報告されている。三角山Ⅰ遺跡の近隣の遺跡を挙げると前葉では前平式土器が出土している中種子町中平寺遺跡（29）、吉田式土器が出土している西之表市の日守A、B、C遺跡がある。また、三角山Ⅰ遺跡（新種子島空港建設に伴う発掘調査）では石坂式土器が出土している。種子島で石坂式土器が出土しているのは、現在のところ三角山Ⅰ遺跡のみであるが、石坂式土器の文化が種子島にまで及んでいたことがうかがえる。

中葉の遺跡は、下剥峯式土器の標式遺跡である西之表市下剥峯遺跡などがある。

後葉では、塞ノ神式土器が出土している中種子町牛の原遺跡や（37）、同千草原遺跡（48）、同大石野遺跡（32）等がある。また、苦浜式土器の標識遺跡となっている苦浜貝塚も町南部に位置する。苦浜式土器はこのほかに中種子町野間的高峰遺跡や、畠田遺跡で出土している。

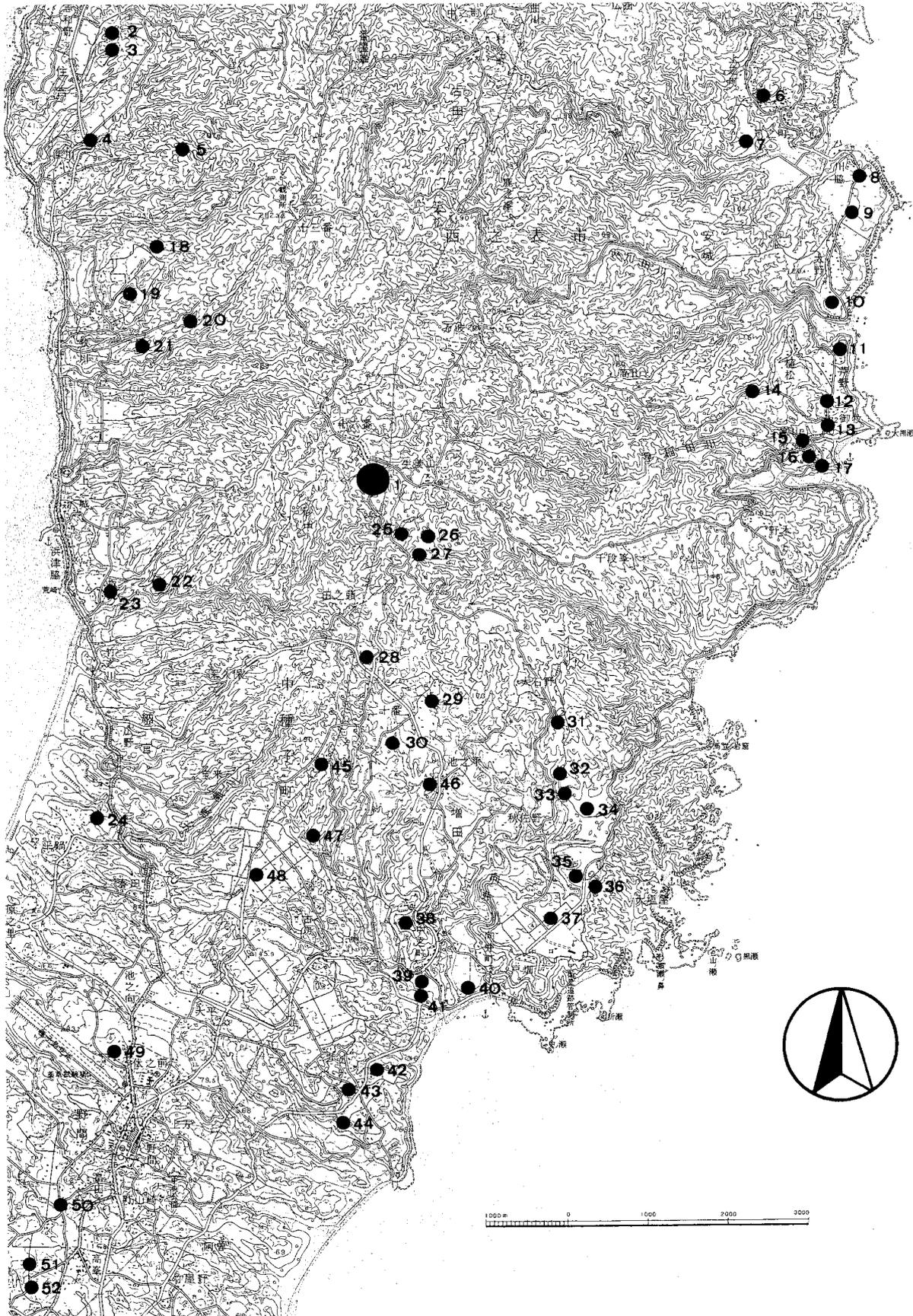
前期の土器型式では、轟式土器と曾畑式土器の出土が報告されている。轟式土器は、前述した下剥峯遺跡、東方ノ平遺跡、中種子町の大園遺跡（23）、千草原遺跡（48）等がある。曾畑式土器は、中種子町の二十番遺跡（28）、千草原遺跡等で出土している。

中期の様相はこれまで全く不明である。

後期では指宿式土器が出土している中種子町梶ノ本遺跡や、大園遺跡、市来式土器や丸尾式土器、一湊式土器が出土している西之表市の奥嵐遺跡等がある。

弥生時代

西之表市の西岸部にある後期の貝塚として上能野貝塚がある。ここでは上能野式土器という口縁部に沈線で文様を施す甕形土器が出土している。また、貝塚を中心としてこれを取り囲むように埋葬が行われたことも明らかになっている。中種子町阿嶽川河口付近にある阿嶽洞穴は、縄文時代晚期から、弥生時代中期にかけて生活が営まれていた洞穴遺跡である。中種子町広田遺跡、鳥ノ峯遺跡は、埋葬遺跡である。広田遺跡は、南種子町広田川河口付近の砂丘にあり、古代中国の青銅器に描かれたものに酷似した文様をもつ貝札が出土した。鳥ノ峯遺跡は、中種子町増田に所在する。



第2図 周辺の遺跡

周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	三角山Ⅰ	中種子町砂中	台地	縄文	隆帯文土器・玦状耳飾
2	俣江	西之表市住吉深川	台地	縄文	吉田式土器
3	斉野原	西之表市住吉深川	台地	縄文	吉田式土器
4	高峯	西之表市住吉深川	台地	縄文	吉田式土器
5	深川	西之表市住吉深川	台地	縄文	土器片
6	通利山	西之表市安城上之町	台地	縄文	吉田式土器
7	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	台地	縄文	隆帯文土器・石鏃
8	三本松	西之表市川脇	台地	縄文	吉田式土器
9	長迫	西之表市下之町	台地	縄文	貝殻文土器
10	東前平	西之表市大野	台地	縄文	吉田式土器
11	芦野	西之表市芦野	台地	縄文	吉田式土器
12	尾呂ノ平	西之表市芦野	台地	縄文	吉田式土器
13	長崎	西之表市安城立山	台地	縄文	吉田式土器
14	奥ノ仁田	西之表市安城立山	台地	縄文	隆帯文土器
15	中園A	西之表市安城立山立山	台地	縄文	吉田式土器
16	中園B	西之表市安城立山立山	台地	縄文	吉田式土器
17	下ノ平	西之表市安城立山	台地	縄文	吉田式土器
18	福丸	中種子町牧川	台地	縄文	土器片・石器
19	太田尻	中種子町牧川	平地	縄文	土器片・石器
20	赤豆野	中種子町牧川	台地	縄文	土器片
21	落ノ下	中種子町牧川	平地	縄文	土器片
22	油久後	中種子町納官上之城	台地	縄文	土器片
23	大園	中種子町納官坂元	台地	縄文～弥生	轟式土器・指宿式等土器
24	東松原山	中種子町増田秋佐野	台地	縄文	土器破片
25	三角山Ⅱ	中種子町砂中	台地	縄文	吉田式土器・塞ノ神式土器
26	三角山Ⅲ	中種子町砂中	台地	縄文	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
27	三角山Ⅳ	中種子町砂中	台地	縄文	
28	二十番	中種子町増田二十番	斜面地	縄文	曾畑式土器・一湊式土器
29	中平寺	中種子町増田秋佐野	台地	縄文	前平式土器
30	本源寺	中種子町増田二十番	台地	縄文	貝殻条痕文土器
31	増田大石野	中種子町増田秋佐野	台地	縄文	土器片
32	大石野	中種子町増田大石野	台地	縄文	塞ノ神式土器・磨製石斧
33	中野大石野	中種子町増田秋佐野	台地	縄文	塞ノ神式土器・石皿
34	東松原山	中種子町増田秋佐野	台地	縄文	土器破片
35	下ノ平	中種子町増田向井町	台地	縄文	貝殻条痕文土器
36	壺里塚	中種子町増田向井町	台地	縄文	塞ノ神式土器・剥片
37	牛ノ原	中種子町増田向井町	台地	縄文	苦浜式土器・塞ノ神式土器
38	東内園	中種子町増田中之町	台地	縄文	土器破片
39	前田	中種子町増田中之町	平地	縄文	土器破片
40	鳥ノ峯	中種子町増田中之町	砂丘	弥生～古墳	貝製品・ガラス玉・人骨・弥生式土器
41	西ノ園	中種子町増田中之町	平地	縄文	土器片・石皿・石斧
42	野間太郎坊	中種子町野間中山	台地	室町	須恵器・青磁
43	的場	中種子町野間中山	台地	古墳	土師器
44	竹原田	中種子町野間中山	斜面地	縄文	土器片・石皿
45	瀬戸口	中種子町増田二十番	平地	縄文	隆帯文土器
46	内山	中種子町増田池ノ平	台地	縄文	磨製石斧
47	増田城跡	中種子町増田古房	丘陵地	中世	山城跡
48	千草原	中種子町増田郡原	台地	縄文～弥生	苦浜式土器・塞ノ神式土器
49	伏之前	中種子町野間伏之前	砂丘	縄文	一湊式土器
50	門口ヶ丸	中種子町野間伊原	斜面地	弥生	弥生式土器
51	畠田	中種子町野間畠田	平地	縄文	苦浜式土器
52	常牧	中種子町野間満足山	台地	縄文	土器片・石器

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の概要

<確認調査>

P地点は、空港建設に伴う付替え県道部分である。建設予定地の西之表市側の尾根から、P1・P2・P3・P4・P5と地点を分け、調査を行った。

① P1地点（確認調査対象面積4,900㎡，調査面積48㎡）

4か所に2×6mのトレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果Ⅱ層のアカホヤ火山灰までは大部分削平されており、下位の層位は堆積しているものの、いずれのトレンチからも遺構・遺物は発見されなかった。

② P2地点（確認調査対象面積1600㎡，調査面積60㎡）

3か所に2×6mのトレンチを、1か所に4×6mのトレンチを設定し、確認調査を実施した。いずれのトレンチでも遺構・遺物は発見されなかった。

③ P3地点（確認調査対象面積1400㎡，調査面積48㎡）

4か所に2×6mのトレンチを設定して調査を行った。いずれのトレンチでも遺構・遺物は発見されなかった。

④ P4地点（確認調査対象面積1800㎡，調査面積108㎡）

9か所に2×6mのトレンチを設定して調査を行った。その結果、13トレンチのⅤ層から石核が1点出土した。また、20トレンチのⅣ層から縄文時代早期の土器片が出土した。遺物が出土したトレンチ周辺400㎡を全面調査することとなった。

⑤ P5地点（確認調査対象面積1600㎡，調査面積12㎡）

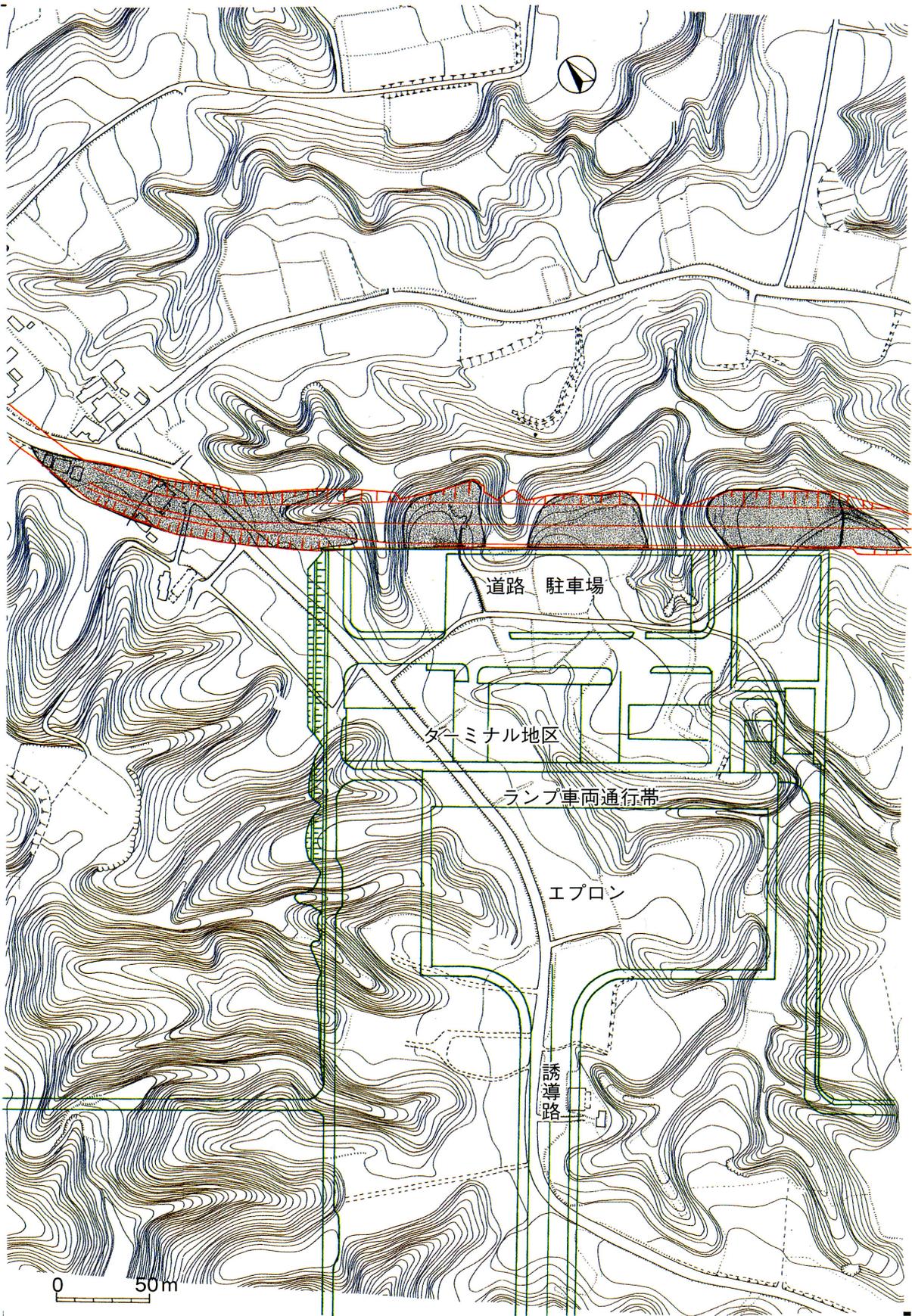
1か所に2×6mのトレンチを設定して調査を行った。遺構・遺物の発見はなかった。

<本調査>

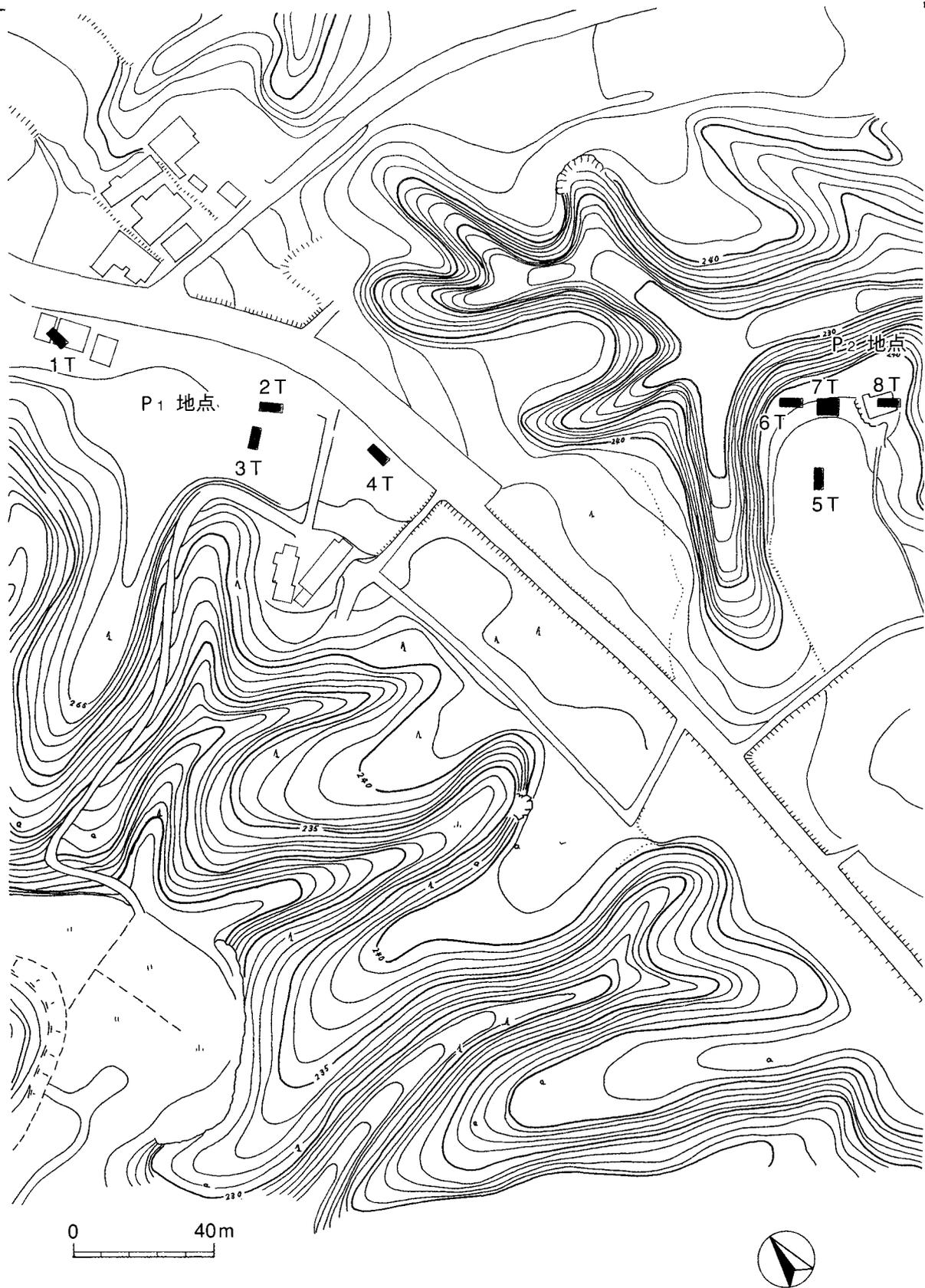
13トレンチと20トレンチで遺物が出土したため、その周辺部に範囲を広げて全面調査を行った。P4地点の東側は削平され、遺物包含層が確認されなかったため、調査は実施しなかった。

今回の発掘調査は、新種子島空港建設に伴う発掘調査と並行して行っており、グリッドは空港調査グリッドから北側に延長してa, b, c-1, 2, 3・・・とした。まず、重機で表土を除去したあと、Ⅱ層から人力で掘り下げていった。

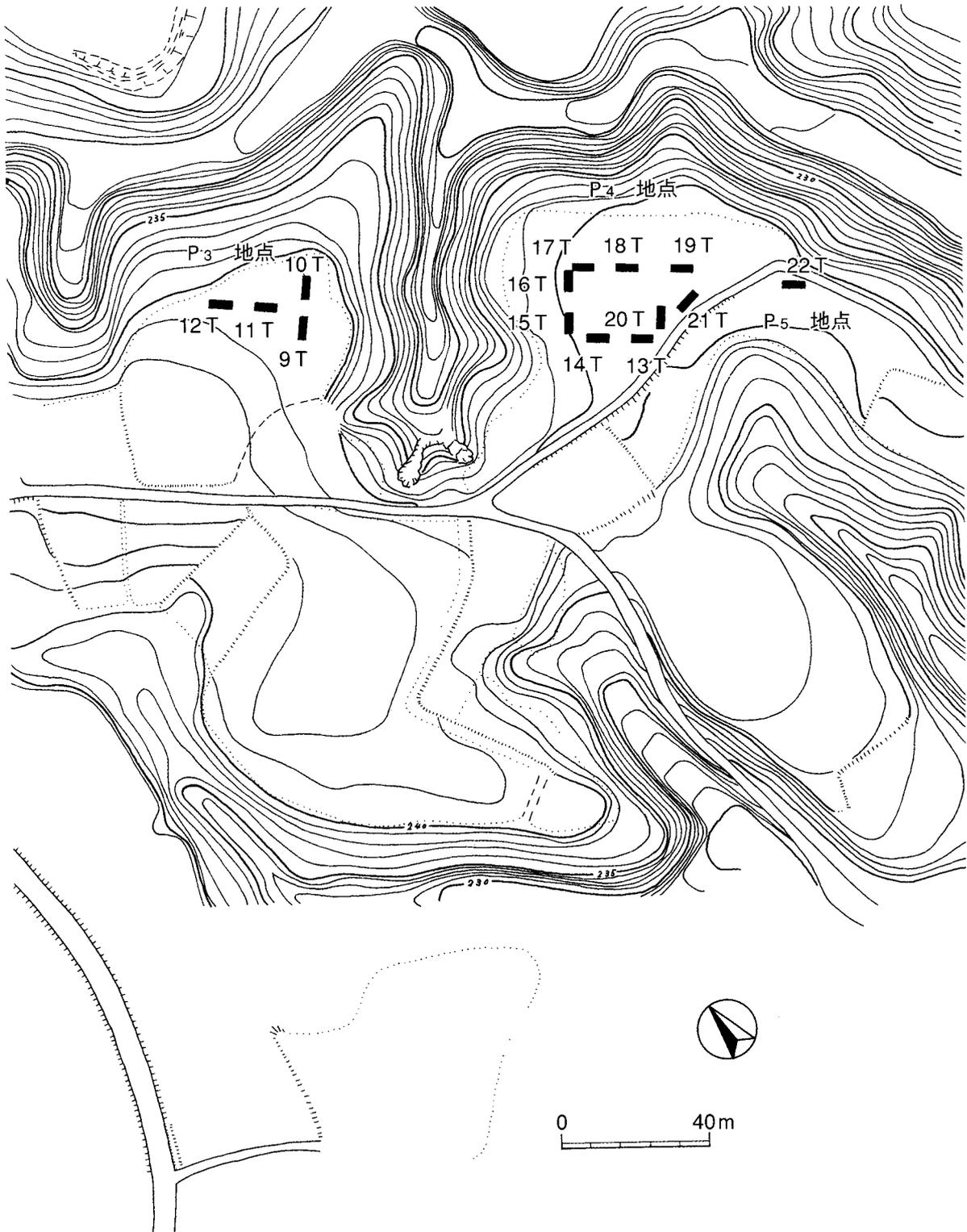
遺物はⅢ層から縄文時代早期の円筒形の土器が出土した。1トレンチから出土した石核の時期の遺構や遺物がないか慎重に調査したが、Ⅴ層からの遺構、遺物は見当たらなかった。



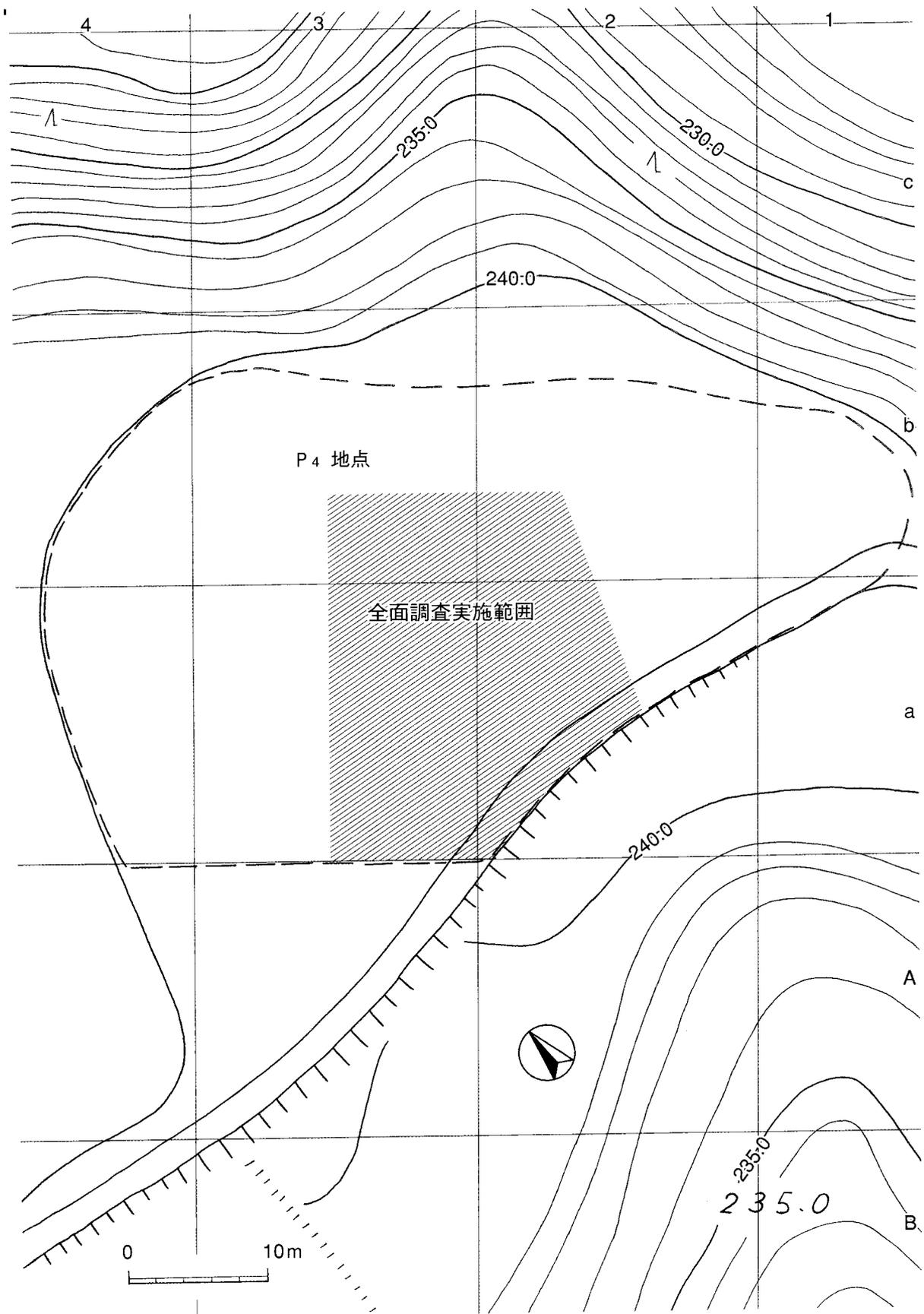
第3図 三角山Ⅰ遺跡調査区と周辺地形及び道路，空港工事施工図



第4図 P₁ P₂ 地点トレンチ配置図



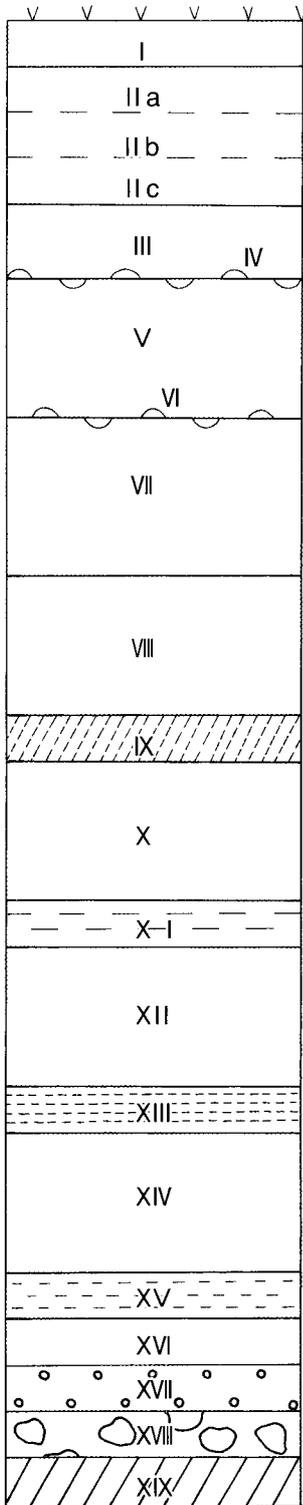
第5図 P₃ P₄ P₅ 地点トレンチ配置図



第6図 P₄ グリッド図と全面発掘調査実施範囲 (1:400)

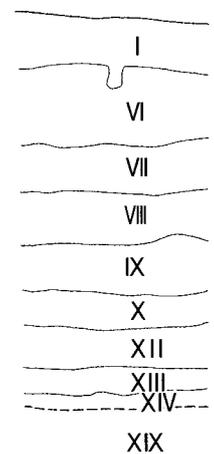
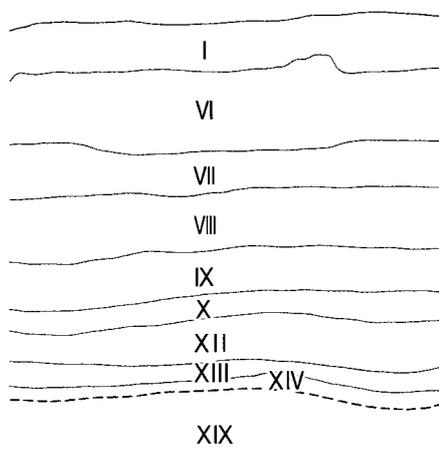
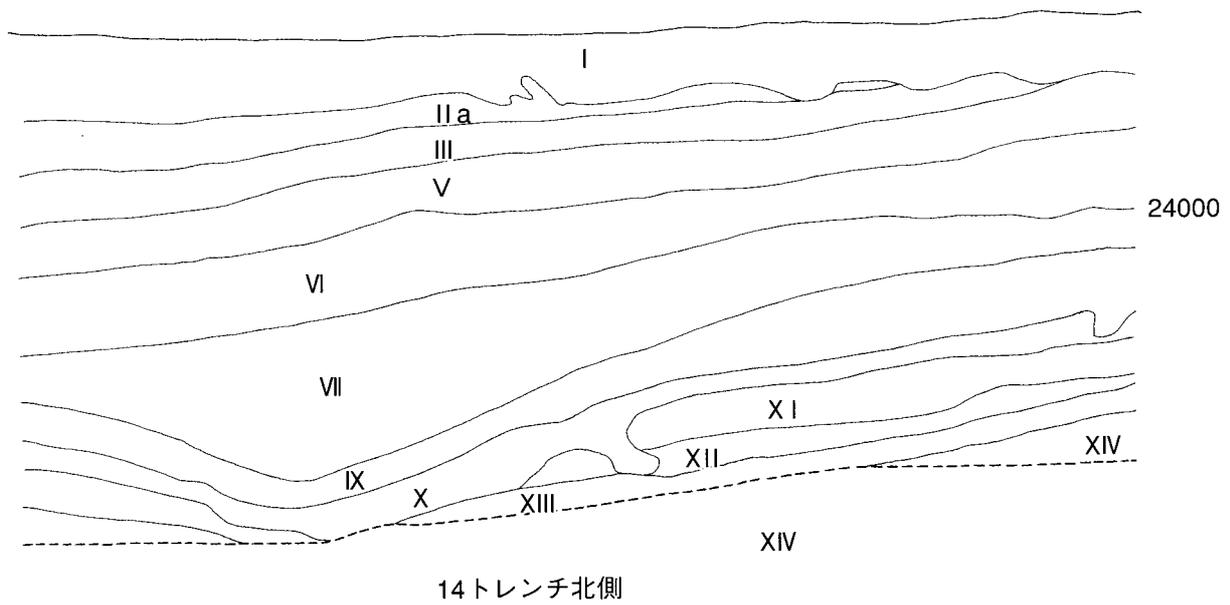
第2節 土層

層序はトレンチにより若干の相違はあるが、基本的には第7図のとおりである。



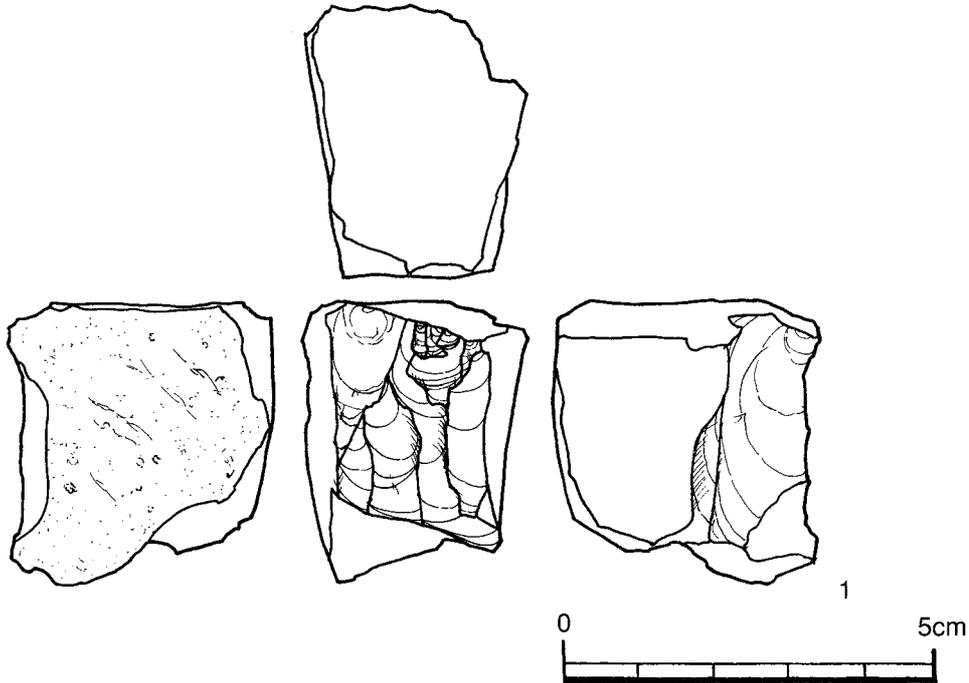
第7図 土層柱状図

- I層 表土（造成土）
- II層 黄橙色火山灰土 : アカホヤ火山灰。約6,400年前喜界カルデラ起源の火山灰。縄文時代前期包含層（空港部分）。
- III層 茶褐色粘質土 : やや粘質をもつ。縄文時代早期の包含層である。
- IV層 黄褐色粘質土 : 全体に広がらず、ブロックで観察される。桜島起源の噴出物で約11,500年前とされる。
- V層 淡茶褐色粘質土 : 薩摩火山灰。層厚が15~20cm程で、縄文時代草創期の包含層（空港部分）である。
- VI層 淡茶褐色粘質土 : 若干の砂を含み、ブロック状に観察される。未詳火山灰である。
- VII層 淡茶褐色粘質土 : IV層と色調は同じであるが、砂を含まず若干粘質が強い。
- VIII層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強い。
- IX層 明黄褐色火山灰土 : 始良T n火山灰。始良カルデラ起源の噴出物で約24,000年前とされる。
- X層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強く軟質である。
- X I層 淡茶褐色火山灰土 : 種IV火山灰。鬼界カルデラ起源の噴出物で約30,000年前とされる。非常に硬く締まっている。
- X II層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強く、硬く締まっている。
- X III層 黄褐色火山灰土 : 種III火山灰。明瞭な堆積である。鬼界カルデラ起源の噴出物で約38,000年前とされる。
- X IV層 淡茶褐色強粘質土 : 非常に粘質が強い
- X V層 黄褐色火山灰土 : 種I・種II火山灰。場所によっては確認されない所もある。
- X VI層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強い
- X VII層 砂岩混じり淡茶褐色強粘質土
- X VIII層 赤色風化砂岩礫



第8図 13トレンチ 14トレンチ土層断面図

第3節 出土遺物



第9図 細石核

(1) 細石核 (第9図)

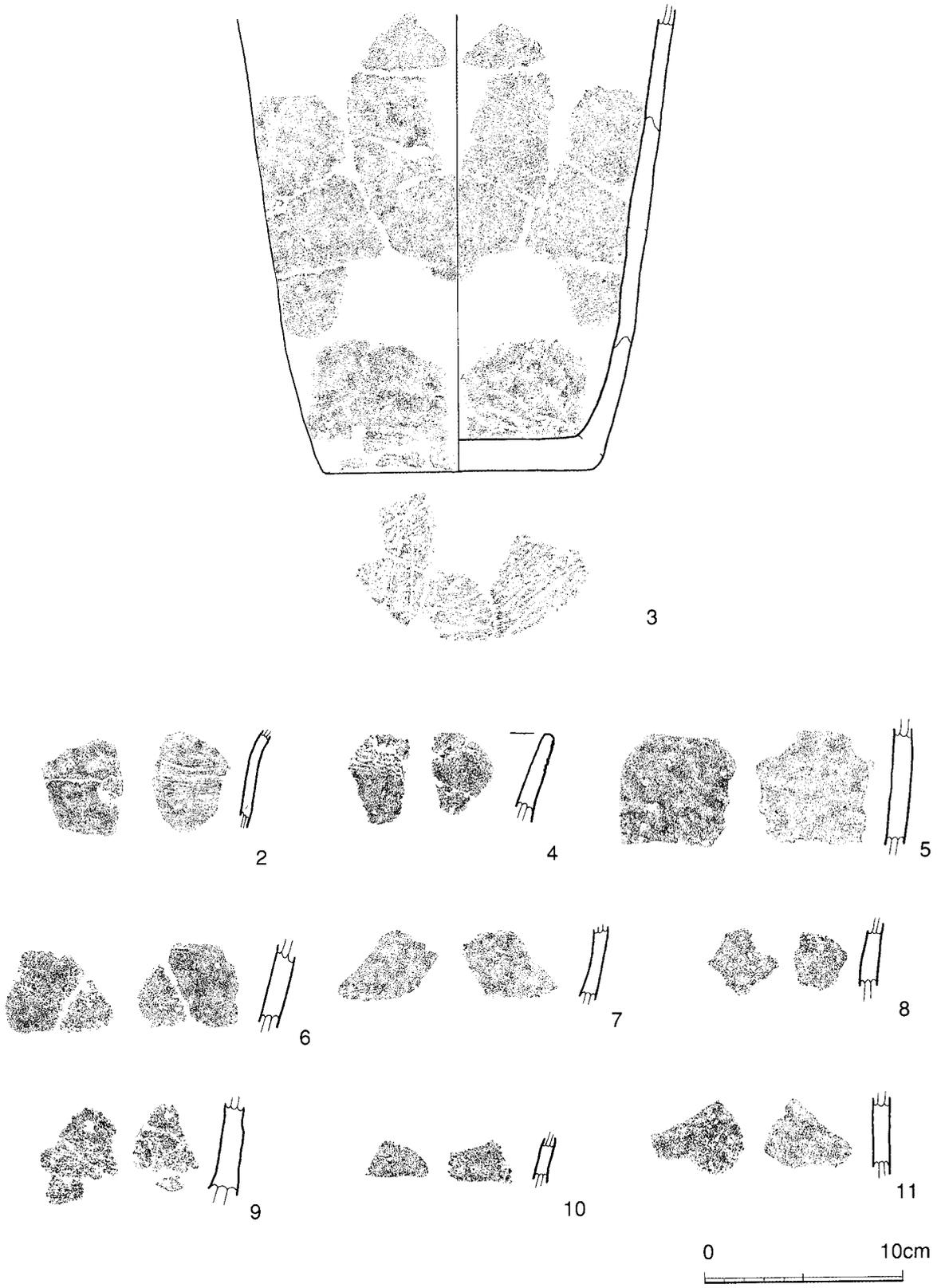
右側面(辺)は平坦面を成す節理面をそのまま利用している。打面も節理面の可能性が高いが、転石ダメージの剥落(離)面の用様もある。いずれにしても、細石刃剥出との直接の作業関係は認められない。

背面と底面は、石核形整により剥出されているが、打角が大きく図示は困難である。作業面左端の剥離ダメージが大きく影響し、その後の作業は放棄したと見られる。打面調整は認めない。

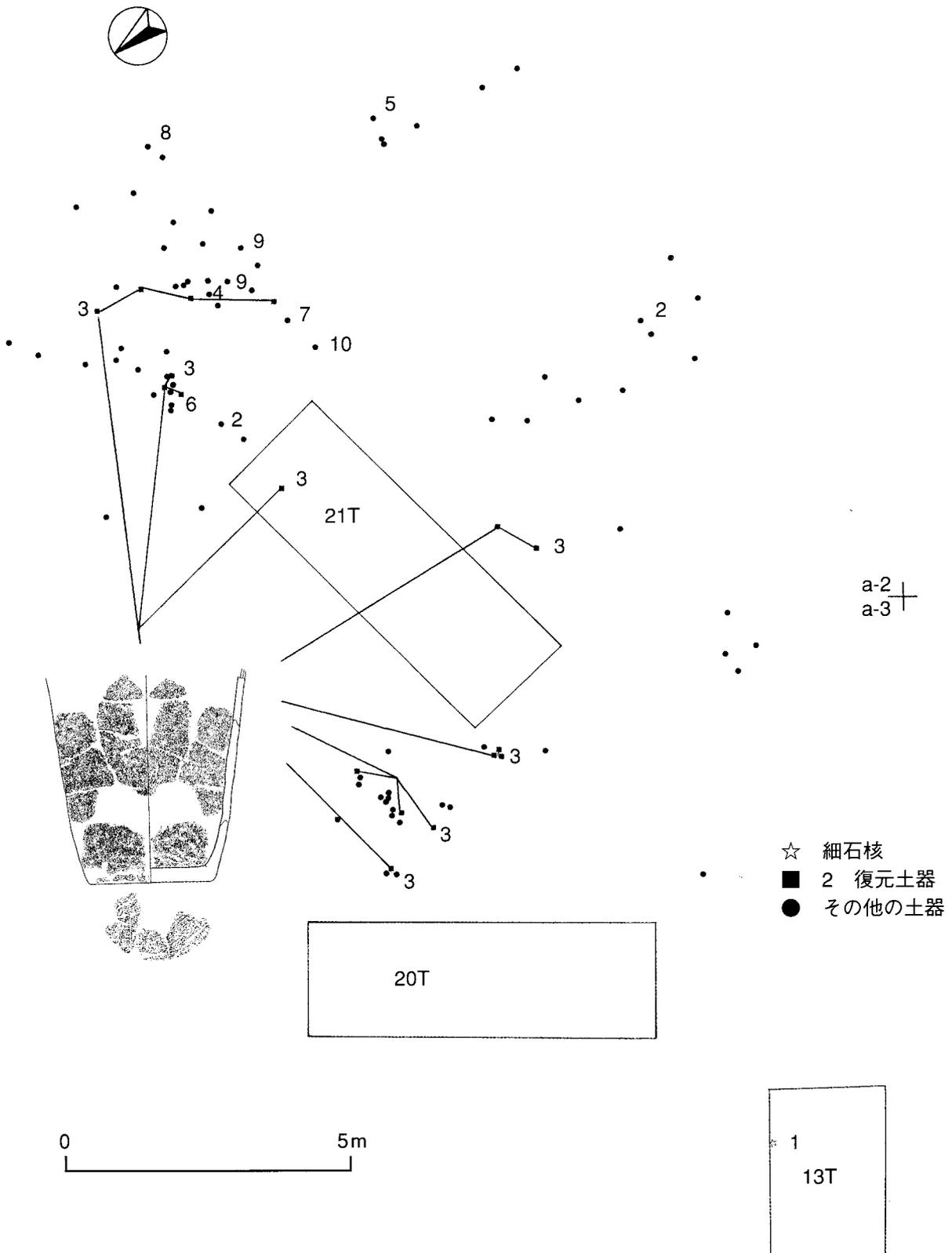
(2) 土器 (第10図)

出土している土器は、すべてⅢ層から出土している。総数77点であったが、今回はその中で掲載可能な10点について掲載した。2は、にぶい黄橙色の土器片である。内外面ともにナデで仕上げられているものである。この1点のみ他の土器とは色調、雰囲気は異なっている。草創期の土器と似た雰囲気をもつので、草創期の遺物である可能性も考えられる。

3は口縁部が欠損しているものの他の部分については、ほぼ復元することができた。胴部は無文で若干のふくらみをもつ。底部付近の外面には横方向のケズリが施されている。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には石英や長石、カクセン石を含む。4から11についても3と同一個体ではないかと考えられる。ただし、3と明確に接合しないこと、器壁の厚みがやや異なることから、別個体の可能性もあることから掲載した。4は口縁部で、貝殻によると思われる数条の波状沈線が施されている。5～11は胴部である。9は底部付近、11は口縁部付近である。胎土、色調は、3と共通している。



第10図 円筒形土器 土器片実測図



第11図 遺物出土状況

第Ⅳ章 まとめ

三角山Ⅰ遺跡では、確認調査で13トレンチから細石刃核が1点出土した。このことから本調査も入念に調査したが、細石刃はもとより、他の細石刃核も出土しなかった。1点だけではあるが、これで種子島での細石刃核が出土している遺跡は、5遺跡目となった。

また、縄文時代早期の遺物包含層が、約400㎡にわたり確認された。Ⅱ層までは削平を受けておりⅣ層で桜島起源の薩摩火山灰が堆積している。遺物はその薩摩火山灰直上から出土している。赤褐色を呈している円筒形平底のみである。

この土器に、近いものと同じ種子島西之表市安城の奥ノ仁田遺跡（地名表14番）の1類土器がある。器形、文様形態、色調などから、あるいは両遺跡間の距離が比較的近いという地理的關係から、両者がどのような関係があるのか今後検討を要する。

また、この土器は、層位的、器形、文様形態からみて貝殻文円筒形土器の最古段階に位置づけられている岩本式土器にも類似する性格をもつ。このことから、縄文時代早期でも比較的古い段階に位置づけられると考えられるが、出土点数が少なく明言するには不十分である。

また、土器2は上記の土器とは全く異なる性質をもつこと、他地点で2に類似し草創期の包含層から出土した土器があったということから、草創期の可能性があると述べた。今後その土器との比較、検討を要する必要がある。

《参考文献》

- 西之表市教育委員会 『奥ノ仁田遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
(1995年3月)
- 桑波田武志 大久保浩二 「種子島の細石器—西之表市大中峯遺跡資料の紹介—」
『人類史研究』12（2000年10月）
- 南種子町教育委員会 『横峯C遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
(2000年3月)

	遺 跡 名	所 在 地
1	大 中 峯	西之表市国上大中峯
2	湊	西之表市国上湊
3	三 角 山 Ⅰ	中種子町砂中字三角山
4	立 切	中種子町野間立切
5	銭 亀	南種子町西之銭亀

第2表 種子島細石核出土遺跡

圖 版



遺跡近景



細石核出土状況



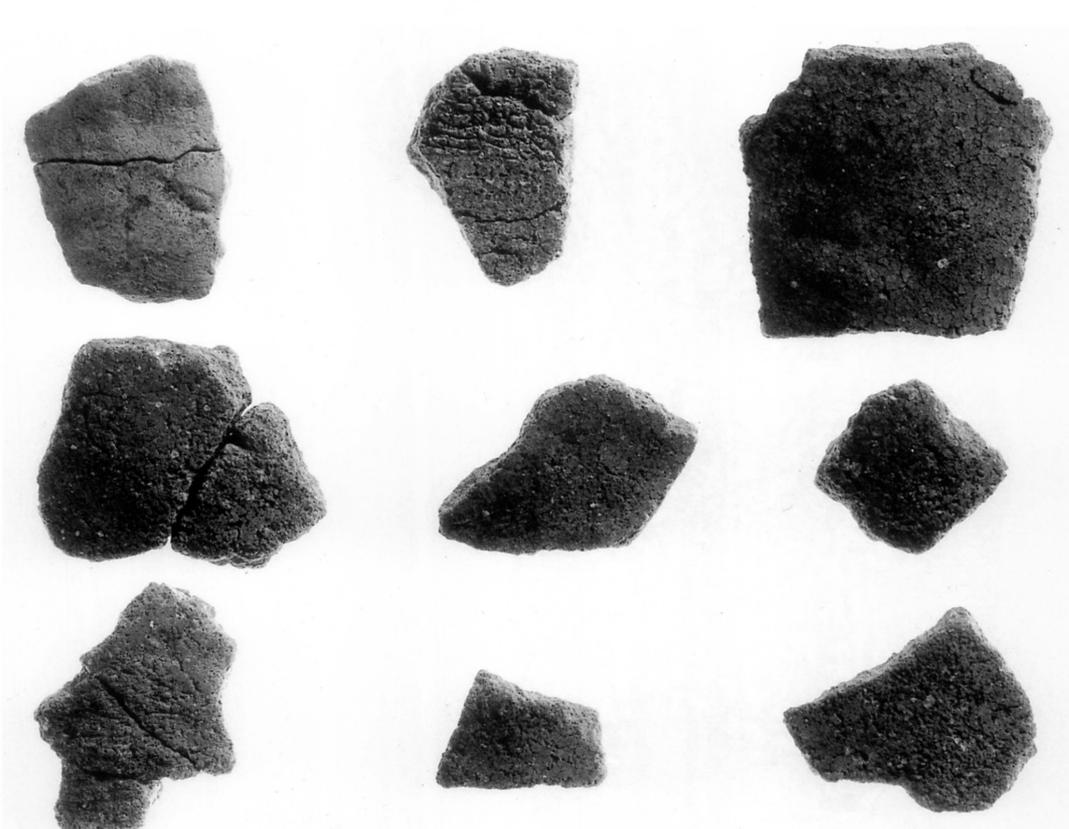
遺物出土状況



細石核



円筒形土器



土器片



第12図 種子島における細石核出土地分布図

あ と が き

平成12年10月4日。初めて種子島の地に降り立った。今まで訪れたこともない地で、どんなドラマが展開されるのか、胸踊らされたことを今でも覚えている。県本土とは少し違った自然、少し暖かい気温、そしてものすごく温かい方々（作業員さん）に囲まれ、とても新鮮で毎日が楽しい日々であった。本土とは離れているため、飛行機通勤ということ、種子島へ弁当を持って日帰りをしたことも初めての経験で思い出に残っている。冬場の調査であったため、週末、種子島空港を飛び立ち溝辺の空港に降りると向こうとこちらでは気温の差が4～5度違うため、同じ鹿児島県内でも海を挟むと別の世界に来たような感じがあった。そんな距離がある場所でも、比較的近くに感じたのは、冬の空気の澄んだ日に島から北西方向に開聞岳が見えたことだ。竜ヶ水あたりからたまに見える開聞岳を南の種子島から見たことは、距離的にはあまり変わらないので当たり前かもしれないが、何かわからない感動をおぼえた。

いろいろなことが思い出に残り、感動した種子島であったが、発掘調査もしっかり行った。その報告が本書である。調査面積が狭く、遺物もそう多くはないが、あまりにも、出土量の多くないトレンチを一生懸命掘ってくださった発掘作業員のみなさん、短い時間で整理作業を丁寧にしてくださった整理作業員のみなさん、薄い報告書ではありますが、初めて報告書を書く私にわかりやすく御指導、御協力下さったみなさんに厚く御礼申し上げます。（菅牟田）

《発掘作業従事者》

秋田 了、榎原美樹、遠藤京子、大山三千代、奥村アイ子、奥村圭一、鎌田可奈子、上敷領重俊、木原慎二、木原桃子、金城京子、久木原フサ子、隈崎タエ子、阪上修司、佐々木歌子、下平アツ子、城木峰子、末吉孝一、揃 昭雄、玉城みどり、月野イツ子、中村武雄、中島タカエ、蓮子よし子、畠中栄子、羽生イツ子、濱田 勝、春田光男、橋野いず子、本鍋田敏子、峯下ナミ子、松下弘子、松原育代、武藤奈美枝、村添智代、山本早志、岩崎スミ子、牧元ソノ、有留香代子、北園幸弘、久木原幸子、戸田和代、日高平太郎、古田辰夫、牧瀬君代、松田スヤ子、峯下久美子、山口みつ子

《整理作業従事者》

岡部安代、川東美登里、齊藤千鶴、鶴みつ子、中村ひろみ、東美和

《御指導、御協力下さった方々》

大久保浩二、沖田純一郎、田平祐一郎、徳田有希乃、野平裕樹

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (46)

三角山Ⅰ遺跡 (P地点)

発行日 2002年12月25日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461
鹿児島県国分市上之段1175番地1
TEL (0995) 48-5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
TEL (099) 250-7033